

美濃のミイラ信仰

白山大権現横蔵寺の妙心上人のミイラと
伝承・伝播における信仰形態

吉田幸平 濃飛甲冑研究所

THE HAKUSAN MOUNTAIN WORSHIP 6.
THE ETHNOLOGICAL STUDY OF A TATELARY-SPIRIT, MUMMY
ON FAITHFUL SITUATION OF THE FOLK TALE AND OF THE
CIRCULATION AT YOKOKURA TEMPLE, GIFU-PREFECTURE

Kohei YOSHIDA, Nohi Armor Museum

1. 横蔵寺縁起

白山の連山が美濃で終わる南麓に、白山権現によって加護され託宣された横蔵寺^(註)がある。この寺は美濃正倉院とさえいわれるほど、多くの宝物を有しているが、特に妙心上人の舍利物であるミイラがある。

『美濃明細記』横倉寺の条には、

大野郡神原邑 天台宗 寺領御朱印四石山林共、両
寺領御朱印四石山林共 両界山

本尊薬師、東叡山末寺、天正比再興歟、俗云、昔の本尊は元亀元年頃叡山焼亡の時、自^二横倉^一遷^ス比叡山^三。云々とあり。

『新撰美濃志』神原村の条には、

横倉寺

坂本にありて両界山と號し、天台宗東叡山の末寺なり。寺領四石山林とも御朱印除地、本尊薬師如来は世に聞えたる靈仏なり。

『沙石集』に「尾張国山田の郡に右馬允明長と云う俗有りけり、承久の乱の時京方にて、弋瀬(杭瀬)河のたたかいに

疵あまたかうむりて、既にとどめさして打捨て武士共京へはせのぼりぬ、友だち二人おちて其辺に忍びて有けるが、夜に入ってかばねをとりて考養せんとして軍の庭を見るに、手はあまた負ながら命はいまだ絶えざりき、さて肩に引かけて青墓の北の山へ具してゆきぬ、あまたの疵の中にからふへをつきとほして土につきつたりける疵むねと大事なりけり云々、其後、黒衣きたる僧一人、横倉より来れりとして、草の葉をもみてたびければ、是を服して腹の中の血有るほどくだして、身もかるく心地もたすかりて覚えける。さて此僧は見えず云々、命たすかりて遙に年たくるまで本国に有りけり云々、



入定妙心舍利仏 美濃 白山大権現 横蔵寺
美濃 白山大権現 横蔵寺

美濃国横倉の薬師は根本中堂の薬師の御衣(きよえ)の木の切にて造り奉れると申伝へて靈驗あらたに聞ゆ、年末常に参詣しけり云々、かかる因縁を以て御たすけ有りけるにこそ返す返す忝し」としるせり。此寺衰微し、天正の頃再建せしともいひ、又俗にむかしの本尊薬師仏は元亀元年比叡焼亡の後、横倉より彼山へ移せしともいへり。云々とある。

(参考)『揖斐郡誌』『揖斐川町史』の横蔵寺の条にも、詳しくその縁起が述べられている。

2. 入定妙心法師のミイラ

(1) 日本人の死後観とミイラ

日本人の死後観に、死ねば「あの世」へゆくというのがあり、それは、「ヨミのクニ」である。仏教渡来以後では「阿弥陀の浄土」か「地獄」「極楽」である。これらは日本人の死後観の主たる骨格をなすものであるが、これ以外に強く日本人が「不死の世界」を求めたことは、蓬萊伝説のもつものとされている。

そして、入定の願望と習俗は、この永生に対する強固な意欲を実行に移して行ったことである。この浄土思想、即ち阿弥陀信仰をもって時代の根底をなす思想と同時に、西方浄土へ救われようというものの外に、56億7千万年の後に、弥勒の下生を待って救われようという入定思想が時代思想の本流をなしていた。入定者たちの信仰を見ると、密教系統の入定思想と、阿弥陀浄土への往生思想が二重構造をなしている。

入定とは、死んだのではなく、肉身のまま禅定三昧に入ったのであり、魂はそのまま肉体の内部にとどまっているのである。この永生思想は、入定した後、必ず魂はトソツ天へ行って、弥勒の出世を待つことであり、弥勒が現われる時には、入定者自分自身も出て来て、前の世の自己の跡を訪ねるというのである。

入定ミイラは、非常な苦行をして入定した人であるから、その困難を克服したところの信仰や意志力に対して敬仰の外、ミイラに参詣することによって、福を授けられるとか、願掛けをして病気を回復する等の民間信仰として地域社会には深い信仰がある。

(2) 妙心法師の経歴

妙心法師のミイラは、岐阜県揖斐郡谷汲村字神原の横蔵寺にある。その妙心法師の伝承は前掲の如くである。

妙心は横蔵寺村字神原に天明6年に生れ、本名は古野小市郎熊吉。幼少より仏心篤く、17歳の時、諸国の寺院仏跡を巡礼。長野の善光寺で仏門に入り、妙心と改名。生食を絶ち日々少量の蕎麥粉を清水に溶いて口にするのみ、食日一行妙心の別号もある。特に富士山の行者僧として有名で、後半生は、甲斐国(山梨県)都留郡鹿留村の御正体に草庵を結んだ。文化14年3月、享年37の年、如来光を感得した法師は、信徒にすゝめて白木の棺を作らせ、その中に安座し、断食称名の境に入った。かくて称名の浄声縷々として流れること31日、座禅入定の素懐をとげた。そして、この妙心ミイラは、現存する日本の西限のものである。

(註) 出羽三山の入定ミイラと比較

- 人工を加えてない自然のままの状態であるとされている。(部分的に、人工的な箇所があり、人類学的に後述する)
- 維新までは、入定の地に御堂の信仰の対象として崇敬を集めていたが、後に、山梨県庁に安置されて、明治13年に明治天皇が山梨県行幸の折に天覧になったこと。山梨県から、横蔵寺へ移ったのは、妙心がこの土地の生まれで、寺の檀越だった関係で、明治23年5月12日に、法師の後孫や親戚が懇願して下賜を受けて、横蔵寺に一堂を建立し、奉遷したことなどを伝えていることが明らかとなった。

3. 山梨県より横蔵寺への記録

『みとものかず』(明治15年宮内省発行。「甲斐志料集成(1)」池原香禪著)には、

『ここ今ひとつは、人の体の乾ものにて妙心といえる僧なり。此僧は古野氏にて、よび名は小一郎、幼名を熊吉といへり。安永8年、美濃国大野郡神原村に生れる。幼き頃より仏の道にこころをよせたりしに、年壮くして、信濃国水分郡善光寺にいたり、あかし法師を師とたのみ、僧となりて、妙心といひけり。この頃より日々にくふものはただ蕎麥の粉わつかなり。常に名たかき御社、音に聞えし寺に詣て、くれかしの山、それがしの水とみありき、中にも富士のね、駒ヶ嶽には、しばしば杖をひき後に都留郡鹿留村に來りて、その山中に草の庵をむすひて、行ひすましかれば、あたりのものこころをよするか多かりけり。

文政12年3月、妙心其こころをよするものをまねき、われちかきに死なんとす。わかために龕をつくりてあたへよといふに、みなうへなひていふかまにまに作り出けり。かくて妙心、其の月の24日といふ日に、そのうちにこもり、扉をさし、仏の名を唱へて、これより絶てのみくひせず、31日を経て、4月25日に死せり。そのかたちやせおとろへたれとも、さらに腐敗れず、たとへは樹などの槁たることくなり。歳37なりしとぞ。かかりしかは、土人これを舍利仏と称へて、花を供へ香をたきて、病なといのるもの多かり。わるかしき僧、かたくななるやからこれを餌として人を誑したりければ、官より土人をときさとし、明治7年これを県庁に収めしめ、病院に移して医の道の学ひの考へに備へしとぞ、これかの越後の西生寺の弘智法師のたくひなり。宮もしはしのほと見そなはして、矢島の製糸場にいたらせたまふ。』云々とある。

これによると、妙心のミイラは、御正体山^(註)の草庵に安置されていたが、悪僧やならず者どもが金儲けに利用するので、県庁では、土地の人々を説得、明治7年に県庁へ奉納させ、さらに医学資料として甲府病院に保管させていた、ということが分る。

この御正体山というのは、

(註)『山梨百科事典』御正体山の条によれば、下記の如くである。

○御正体山(みしょうたいやま)

山梨県道志村の西南約8キロメートルに位置する。標高1682メートルで、壮年期の地容を呈している。古く修験道の道場として知られ、市内鹿留沖からの登山口が正しい。また市内菅野、細野、道志村からも登山できる。頂上には御正体権現が祭られている。

妙心上人(古野小一郎、幼名熊吉。1779～1815年)が修業したという上人小屋があった。その後に妙心はミイラとなり郷里の岐阜県神原(かみはら)へ現在は保存されている。ふもとの細野地区では古く「お刈り分け」の行事があった。長雨続きで麥の芽がはえるような困難をする時は、みの、かきをつけた村人たちが手に手にカマを持って参道の草を頂上まで刈り上げてゆき、頂上にこの人たちが集まって、用意した神酒を権現に供して天気回復を祈り、神酒をくみかわして下山するころには、不思議と雨もあがり日の光も見ることができたという。

4. 妙心上人の年齢について。

前述の『みとものかず』は、天皇の随行記であるので、真实性があると思はれるが、妙心の生没と年齢が合はない。

安永8年(1779)に出生し、文政12年(1829)に入定というが、これだと51歳になるが、「歳37なりしとぞ」と述べているのである。これに対して、寺伝では、天明元年(1781)に出生し、文化14年(1817)に没し、歳37となっている。

安永→天明・文化→文政と続く年号であって、大して時代が離れているわけではないが、没年37歳を基準にして考えると、著者の池原香禪が誤記したということも考えられるが、如何なるものであろう

うか。

また、寺伝では、「妙心のミイラを明治天皇が御覧になった」としているが『みとものかず』の明治13年6月13日午後の条には、

天皇の御名代として、伏見二品親王が、甲府病院を訪問し、妙心のミイラを御覧になったと記している。また山梨県都留市夏狩内森・宝鏡寺・佐藤時丸住職より紹介された『廉留山妙心上人由来和讃』の妙心の条には、

○帰命頂礼善光寺

大勳進の弟子となり、まわりまわりて廉留の深山に登りし妙心さま一世妙心、二世妙善尼、三世臣戒、上人さま、此人和贊を作り置き、いざ物語らん世の中に高德知らざむ往昔よりあれどもここにまれなるは、甲州都留の郡なる、廉留山をひらかれし、食日一つの大行者、妙心鏡光あじやり仏、清き流れの民さして60余に、かくれなき岡田家臣のある中に、忠臣無こと仰かれて家名も高き古野氏、父 澄一の三男は、安永8年仲の冬、母 濱ぎくの子と生れ20あまりの3つの年、剃髪染衣の身となりて、粟散、日城をのこりなく千山万岳ここかしこ汝垢難跣足行修め、うきかん難の功を積みをもかしこき道を聞き娑婆は無常の理をさと難行道をふすすとて一向専修門に入り、化益度衆生したまへど、いまに化縁もつきざるに
頃文化の12年3月7日のあけぼのに、八重の霞をふりわけて、廉留のをく山に入40余日の断食も、すでに卯月のすへ、いかに23日の夕べより、はやあかつきとなる頃は沢の清水に身をそそぎ、臨終行儀ただしくも、24日の午のときすぎれば、末の上刻に鉦ごのをともかすかなる念誦のこいもろともに齡37にして、若葉の雫、卯の花の露ときゑさりたまいきり、今世に残り遺体の菩薩の相をあらわして、病難負苦を救わんと誓ひの言葉に洩れざるは、これや上品、地藏尊垂迹この土へ来現し、悪世の郡徒をみちびきて、利生のなき法の庵、遠く詣ずるともからは、千古まれなる感應を近く象はる老若の日々に信をましにけり、ここに和さんを止めけり

阿弥陀ぶ 阿弥陀ぶ 阿弥陀仏
南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

云々とある。

これは、現地都留における寺伝を示す資料で、住職の記したものである。

白山信仰における横蔵寺については、『十一面観音巡礼』白洲正子著は、「白山比叅の幻像」の条に、「横蔵寺は、伝教大師が諸国行脚の途中、美濃の赤坂まで来た時、北の方に光がさすのを見、辿って行くと揖斐川の上流の山中に至った。その時、白山権現が現われて、大師の護持する仏像をこの地にとどめ、永く衆生を済度せよ；という託宣を与えた。延暦20年(801)大師はここに一寺を建立し、両界山横蔵寺と名づけたという。「美濃の赤坂」というのは、神戸の日吉神社のあたりか、もしくは、そこに古くからあった白山社が、山王七社の中に吸収されたのかも知れない。住職のお話では、今はまったく関係がないということだが、伝教大師が辿った道を実際に歩いてみると、かつては白山信仰によって、かたく結びついていたように思はれる。私の目の前には、又してもあの美しい神戸の十一面観音が彷彿として浮び上るのであった。

横蔵寺は、白山大権現の寺として展開したことが明瞭である。即ち須弥山説における前伏拝山であり、前山信仰の山であり、葉山(羽黒三山では、こういう。また端山)である。横蔵寺は、白山信仰の中に展開した白山信仰の美濃の一拠点である。

5. 妙心上人の、仏道を覚知し煩惱を解脱して、仏陀し覚者しとなった御躰山の入定地に至るまでの法師の足跡

(1) 生国美濃谷汲山から初めて、西国33ヶ所の観音堂の巡礼。

- ㊦(2) 秩父34ヶ所の観音靈場礼所参拝 ㊦
- (3) 四国88ヶ所の弘法大師の靈場を巡拝。
- (4) 坂東33ヶ所の観音の寺堂を巡拝。
- (5) 碓氷峠を越えて信州善光寺に來り、善光寺の萬善堂の弟子となり、妙心の法名を稱する。
- (6) 信州諏訪大明神に参詣。
- (7) 「諏訪の海 衣が崎に來てみれば ふじのみねこぐあまの釣舟」
歌の心にまかせて富士山に登り、富士の人穴に立て籠る。
- (8) 「富士の人穴は、餓鬼あり、修羅あり、畜生道あり、また極樂あり地獄あり、」そこでそこから更に修行の途につく。^(註)
- (9) 甲斐国都留郡鹿留村の宝鏡寺及び長泉院を参拝。
- (10) 鹿留村庄屋渡辺家に滞在し、諸国の情勢、仏法の道、現在までの修行の道を説く。
- (11) 鹿留村御正躰神社の案内を受け、登山。
- (12) 神社の下方、泉の湧き出る岩の下を、修行の「場」と決定し、事後数年、あるいは10数年そこに留り、入定に至るまで、座禅を組み、時には登山して來た村人に説法し、書を習い、修業中に感得したところを真筆として書き置く。
- 以上の妙心法師の巡礼、修業の足跡は、ほぼ間違いない。
- これらのことから、まとめてみると、
- (1) 妙心は、元來、木食行者であったが、のちに、富士行者となり、行名を食日一行妙心といったこと。
- (2) 如来の來光を感得して入定を決意したこと。
- (3) 31日間の断食の末、入定したこと。
- (4) 入定年が文化ないし文政年間であること。
- (5) 美濃の出身で、当時 御岳信仰が爆発的に盛んであったに拘らず富士信仰の行者であったこと。

(註)

富士の人穴は、拙藏「富士人穴」(天保4年癸巳7月下旬31日正來写之 鍋田邑惣右衛門)なる署名、また、「富士人穴」年号無記入「三州細川順行寺祐慶」なる署名の両書から、人口膾炙の周知の如く、富士の洞穴である人穴に地獄極樂を設定して物語を展開したもので、地獄道では罪人らの呵責を受けて苦しむ凄惨な場面を次から次へと展開したものである。

6. 富士信仰と富士講

富士山は、太古以來殆んど人跡未踏の秘峰として、大きな山体をひそめており、この大山の頂に伸びる踏跡などは、一路もなく、一般常民には考えられぬ領域として、長く秘境を保持していた。富士修験は、神秘の山として、遙拝した浅間信仰に、登拝の山という警鐘を打鳴らしたのであり、山岳信仰として展開したのである。しかし、大噴火が江戸中期にあった関係上他の山岳信仰よりは遅れ、富士修験が賑い富士講が流行したのは、江戸中期である。しかし、天台系の密教教義による聖護院に根拠をもつ本山派と、真言密教を本旨とする三宝院醍醐寺を根拠とする当山派は、富士を行場として、互に勢力の覇を争っていた。

富士講は江戸の中葉、爆発的に栄えた新興山岳信仰であり、特に富士講の影響が現われたのは、享保(1716~1735)頃からである。そして講の普及は、驚異的な宣布力があり、江戸を中心とする関東全地域へ燎原の火のように広まって行った。(註1)

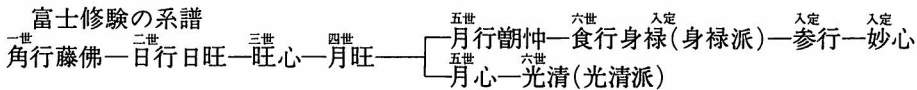
しかし、これには、角行行者が開祖だといわれている。

戦国時代の相つぐ戦乱に引続いて、江戸幕藩体制の下に喘いでいた庶民にとって、信仰は、最大の

救いであつたに違いない。

角行はそこに、新しい救いの手として、新興宗教富士講を開いたということなのである。

富士講は、日本の最高峰へ登拝するという登山をかねた信仰であり、多分に呪術性もあつて、庶民の人氣が集まつた。特に、江戸中期の食行身祿行者が富士で入定。「四民平等、富士のような清浄な世の中」といった精神を高くかがけて以後に、驚異的な流行を見たのであり、八百八講といわれた程の黄金時代を招来した。但し、身祿の平等思想は、再び呪術的なものへと逆行してしまつたが、やがて明治に入って宗教改革によって富士講は、それまでの本地垂迹的なものから神祇信仰へと方向を転換させられ、丸山教、扶桑教などと名をかえて発展、こうして戦前まで隆昌を続けてきたものである。



(1) 妙心上人は「食日一行妙心」ともいい、入定したのは、参行上人が入定してから、ほど遠からぬ文化14年(1817)(寺伝)のことである。

「食日一行」は身祿派に見られる行者名で寺伝によると、参行(京都出身、本姓は花形浪江。家業は彫刻。江戸へ来てお花に教えを受けた。後、身祿の本姓、伊藤伊兵衛を襲名したが、富士信仰と加特祈禱を分離することを考え「不二道」の基礎を開いた。)が入定した時、妙心は29歳になっている。

(2) 如来の来光を感得して入定を決意したという点だが、如来は大日妙来であり富士仙元大菩薩のこと。これが入定につながるのは、身祿を信仰すればこそと思われる。

(3) 妙心が31日間断食の末、入定したという点である。身祿派行者にとって、「31日間」は神聖なる日数である。まして31日間断食の末、入定することは信仰の極美であつたらうと想像される。

7. 妙心入定を巡る背景

「鹿留山妙心上人由来和讃」によると、

「汐垢雑路足行修め、うきかん難の功を積み、をいにもかしこき道を聞き娑婆わ無常の理をさとり難行道をふりすてて一向専門修門に入り」云々とし、

食日一行の身祿派の行者として、31日間断食の末、入定したことになっており、人工を加えない自然のミイラであるとしている。しかしながら、

昭和25年名古屋大学医学部の調査では、内臓は全くなく、人工的な感がすることであり。特に右鎖骨下に人口切除の穴があり、明らかに内臓をとり出していることである。

この点について、松本昭氏は、

「人工を加えてない自然のままであるとする伝承や、文献から、白木の棺を作らせ、その中に安座し、31日に座禅入定の素懐をとげたとして、今まで述べられてきたことは、誤りであり、訂正されなくてはならない。

富士行者にも、湯殿山系(羽黒三山)のミイラ行人が真言宗を奉じていたが、天台系の強力な羽黒山派修験による併吞を防ぐため、殊更に弘法大師信仰を高揚して対抗し、ついに真言宗の教理である即身仏を実現するため木食行を修行し、飢餓状態の末に、土中入定してミイラ化を念願とした。

3年を経て、内臓を取り出し、ミイラを即身仏として羽黒山に対抗したことである。

富士行者にもこれに似たことはなかつたのではなからうか。

富士修験の斗争の歴史は、深く追究されたものが見当たらないが、改めて、探究してみる必要があろう。それは、妙心の入定以前の同じ頃の文化6年(1809)8月10日、前述の伊藤参行が入定している

ことであり、同じ「身祿派」であると思えば、右の2人の外、まだ1人や2人は入定ミイラが、身祿派からあったのではなかろうか。」と述べている。

(1) 富士修験争論

富士山中が、浅間信仰の修験行本山になるのが、他の名山秘峰より遅れたことは、重に有史以来の驚異的噴火が発生したことによる。

本格的に富士山内が修験者達で賑わいだしたのは、室町期からであり、爆発的人気の出たのは江戸中期からである。

当時天台系の密教教義による聖護院に根拠をもった本山派と、真言密教を本旨とした三宝院醍醐寺を根拠とする当山派が富士を練行の場として、お互に教勢の拡張にしのぎを削っていた。

修験者達は、各自の寄属する宗旨寺院を、富士山麓近くへみつめて、そこを山づき本拠として富士修験に目標をおいたが、当時、甲斐山梨郡北原の里に、金剛山胎藏寺という古刹があって、ここが富士北麓 真言宗当山派の根拠地とされていた。その後、河口の里へ巫子と同棲して、定着性をみせたと考えられる修験者は、この当山派傘下であり、富士山御師（おし）に不可分な影響を与えたのも、当山派修験道である。この胎藏寺には、富士当山派修験の地方最高位である辻之坊法印「看判阿闍梨」が権力を持っていた。こうした地方修験高位式格を得るのには、実践行動山中入峯を根本としたので、多年の峯入練行で大先達の地歩を固めて、総本山から具足戒の修道を受け、後継者に充分修法を授けられるのである。

指導力のあるものだけに授けられる許状もちの首長なのである。

この寺内には、北之坊・和泉坊・正覚坊・大円坊など各看判阿闍梨をとりまく、大先達格の験者が、験者坊館をつくって従属していた。そのほか桂川の流域、十日市場村の竜泉寺が、山づき地の寄存根拠とされていた。これに反して、本山派は、大峰山から派遣された修験者たちをもって、当山派と対立し、下善村の三光院に富士修験の本拠を構え、数において絶対位をもった本山派は、常に当山派の抗するところではなかった。

それだけではなく、羽黒山にたて籠った羽黒派は、桂川筋上暮地村光正院を足がかりとして、入峯、各派いり乱れて富士奥山で荒行法性真如の山から出では、無明煩惱の敵を伏するという、捨身求道で、仙人さながらの神仕え者たちであったのである。

その教義には多分な呪術的附会が、実動的に飛躍していて、ともかく人の近づかぬ富士厚生山体へ踏み入る超人的な異形の神がかりの存在は、山づき農民には山伏とか山臥の名で呼ばれて、畏怖の眼で眺められていたのである。

富士山内深く分け入った修験者は、派閥毎に定められた行場で、精進・潔斎・参籠・祈禱三昧にふけり、金胎両部本有の密教華藏の場で、不壞の法身呪力を証得しようとして、本山派は当山派の上に大きくその勢力を延していた。全盛期には富士修験は数万といわれたのである。（註）

当山派が本山派に対抗する手段は、何をもって斗ったのであろうか。

これと斗うためには、湯殿山が羽黒山に斗ったのと同じ宿命の道をたどったのではなかろうか。ここに人工ミイラの背景が考えられる。

(2) 身祿派と光清派の争論（前述系譜参照）

食行身祿は富士講中興の祖として、創祖以上の崇尊の焦点となっている。

彼の門弟の行者 割仲は、元禄12年（1699）から3年間にわたって、京の関白に富士講を、正統信仰としての裁許を得ようと上訴したが、異教新法一切は、切支丹禁令の厳しかった時代だけに許容されず、布教も全く進まず共鳴信徒も指折り数えるほどより得られなかった。遂には放棄したように、晩年は女色にふけったという口伝まで遺している。

そこで、伊兵衛はわずかな信徒に推されて、宝永6年(1709)別立6世行者となり、行名を食行身禄と名乗った。

一方直系6世として、江戸の財閥辣腕家、村上光清が正徳3年(1713)頭角を現わすと、富士講は身禄派と光清派の二大色分けとなって、期せずして布教対立を競いあう谷間へ立たされた。事実創始以来このころまで、講らしい集団組織は結成されていなかったのである。

しかし身禄の精意を売りものにした気性だけでは、光清の巨財を背景とした社会的にたけた手腕の敵ではなかった。光清派の講中が各所に活発な動きを見せだしたところ身禄も東奔西走講中集めに旅を重ねたが、折角築いたと思った地盤は、強力な光清派の手が廻って、砂上の樓郭にも等しく、次々と崩れてゆく始末であった。そして、光清派の日毎の隆盛とはうらはらに、身禄には乞食身禄の名が附され、市井の人もおし売り門つけぐらいに、冷笑さえ浴びせ近づく者すら激減していたのである。身禄が富士に心身を捧げ入定し果て、身を即心仏ミイラにして、布教の実を挙げようと決意したのもこのときとされている。

享保18年(1732)北口7合5勺烏帽子岩の地を撰んで、31日間の断食を執行し、日々十郎左衛門に口伝したのが、後富士講の中心教典となった「31日之巻」である。身禄は予定した31日の大口授を終ると、富士山の山靈として生命の終焉を告げたのである。それがため富士講は、身禄の名と共に驚くべき伝播力で普及して行ったのである。

これに対して、光清派は、恵まれた巨財にものをいわせて、自派の独力で、享保20年(1735)から上吉田の浅間神社の大造営施工に着手したのであったが、身禄の遺業は財力と辣腕、社交術の攻するところではなく、富士講は身禄傘下でない、夜も日も明けぬ黄金時代を現出したのであった。しかし、第2回目の光清派の攻勢に身禄派の勢力が弱まろうとした文化年間に、また即心成仏となって身禄派を守り続けたというのが、妙心上人であると考察する。この意味では、縁起で見る自然ミイラでなく、良く観察すると、それは、内臓が取り出され、人工的ミイラであるということから、富士行者に、湯殿山と同じく、ミイラ作りの習俗が、宗教闘争の陰にあったと推察される。

6世食行身禄や妙心が、いずれも即心仏ミイラとして、いずれも31日間断食の末入定したという点は身禄派として、信仰の即心仏になると同時に、光清派に対する壮烈なレジスタンスであったことを改めて知ることであり、人工ミイラの思想があったという羽黒三山の宗教闘争の富士講版であった。

8. 妙心入定ミイラの人類的考察

昭和25年5月、名古屋大学医学部法医学教室の名倉重雄、小菅真一、古田莞爾の各教授、滝川清治講師が調査団となり、調査をしたが、その後法医学教室が、再三再四移動し、それに、主任教授が故人となり、このミイラ測定の結果は、学界に未発表のまま埋もれてしまったのである。

この測定諸元の情報提供について、執拗に追究し、大学も探究したが結局は、未見のまま不詳ということである。

このミイラは、現在、信仰の対象として存在せしめているので、住職は絶対不許可であるとし、早稲田大学安藤研究室の日本ミイラ研究グループが測定を申し出ても不許可の現在名古屋大学測定諸元がないことは残念である。

この意味では、日本人類学発展のために、再調査をする必要がある。

当時の調査団の参加者であった小菅真一教授からの当を得た資料に対する情報を得たので、その序説として、掌握出来た範囲を呈示することにする。

田1) 調査団



名古屋大学医学部法医学教室

教授 名倉重雄（故人）

助教授 小菅真一（現中部労災病院長）

” 古田莞爾（故人）

講師 滝川清治（現名古屋市立大学教授）

後援 中部日本新聞社・社会部記者

横井保平（現愛知学院大学教授）

- (2) 中日新聞記事（昭和25年5月26日付）によれば、頭部は、よく保存されているが、黒褐色であるとしているし、事実このミイラを拝観し、直観させられることは、ミイラ成立後に燻しているか、或は柿渋でも塗布した第二次的なことが伺える。

これらについては、寺伝では、全くなく自然のままのミイラであるとしている。

- (3) 右鎖骨下に人口切除の穴があること。

これは、第二次的加工において、内臓を剔出したことが歴然としている。

それがため、内臓が全然ないことである。

新聞では、

① ミイラ化の原因として、断食法のための内臓が清潔であったこと。

② 場所が火山灰地帯で乾燥した富士山麓であったこと。

③ 断食のため次第に貧血し、ミイラに近づいて飢餓死したのである。

としているが、右の状況では、日本の6月では湿気が多いので、困難であり、第一次・第二次の即身仏に対して加工されていることである。

記事では、年齢について、

『骨格には若年性所見も老年性変化もみられず行年37歳は動かないところである。』としているが、

X線測定の結果では、軽い老年型の脊椎症があり、骨の摩滅状態が知られ、粗鬆症があり、年齢は、文献や伝説の37歳ではなく、52～53歳である。

湯殿山のミイラで50歳以下のものは一体もないところを見ると、信仰的にも52、3歳が正しいのではないか。

小菅真一教授は、この37歳説について、絶対に誤りであるとし、新聞発表記事は誤りであると強く否定している。

骨の粗憫症（そびんしょう）と脊椎症（とげのある包骨）が出来ていることから、即ち骨のいたみのことを考えると50歳前後と思われる。（粗憫症＝骨がもろくなっていること）

これに附加して、その後、名古屋のテレビ局（CBC）工事現場から、武士のミイラが3体出土した。（1体は名古屋大学、その他は松本医大等）それらと比較すると、明らかに、50歳代といえる。

- (4) 頭骨は、長州型といえる普通の日本人の頭骨である。これに対して、新聞発表には右脳室が左にくらべて異常に拡大して見え生前の退後性変化によるものと考えられるので、一風変わった人ではないかという見方も生れている。とあるが、これは再調査が必要であろう。

- (5) 体重は約8キログラムであったが、生前正常時には、42キログラム位の小柄の人であったと思われる。

- (6) 身長は、160糎、座高は90糎位の足の短い日本人の平均型である。

- (7) 骨髓を採取した反応を測ったら、生体反応があり、オキシダーゼ（インドフェノール青合成法—血液塗抹標本をホルマリンアルコールに数秒間浸す。）は陽性で、細胞のある部分は現在も存在していた。

生体反応＝生きている身長における生化学的変化で生体物の運動のごたえ)

- (8) 空風状態の白色ミイラ。

自然風化に伴う蛋白分解等有機から無機への転移ではないか、人工的に白色石灰を薄く塗布したと思われる点がある。

- (9) 血液はO型であり、意志が強い奇行の士であった。

- (10) 第一次加工の折工を組ませて、姿勢を座姿勢から結跏趺座位をとらせている。

- (11) 細胞は固定されている。

9. 妙心法師原本

最初数行破損

- (1) 日月仙元の御教菩薩を鹿末にいたすと今生より今生より餓鬼道に落ると心得べし
餓鬼道とはかくの病気の人と相心得べし

— 富士仙元大日の山の徳をあらわし人をたぶらかす事我法になし

— 荒らき行法を見せ奇妙をいひ師の教なき事を云ひ人をたぶらかす事我法になし

— 生あるものの命とるべからず蚤虱に至る迄人間と事なれども命のおしき事は常なりと相心得べし

— 鳥の巢たち致すべからず 無益の殺生致すべからず 我子成長の後 此世の露ときへゆく事は日月の鏡にかけたるとくとなりごとくとなり

— 人の所の外に立聞致すべからず 3尺の下のむしもしやうめつすると相心得べし それによって地獄に落ちると心得べし それによって地獄に落ちると心得べし

— 嘘をつくべからず 物をいわざるものにきつき事をいたせしは末の世におしに生れ出ると相心得べし

— 足にて物をおしへ杖にて物をおしへし人は末の世にいざりと生ると相心得べし

— 人の物を手をさして取べからず 末の世にてんぼに生ると相心得べし

— 神に幣をきり注連をはり仏に花をそなへし人は末の世に美人と生ると相心得べし

— 慈悲善根つき人は末の世に長者にも生ると相心得べし

— 神社仏閣高山をふみつくして末の世にその国に大命に生出ると心得べし

— 南無元の父母様日月仙元大菩薩の御恩徳報じがたし 近くは両親ののおや 西33番秩父を廻り四国辺路いたし坂東を廻り信州善光寺に來り 富士の高嶺に登りても母親の七夜の内の恩よりほか送れんものと相心得べし 親には腹を立せずは孝行なりと相心得べし

食日一行妙心

(2)

— 我女房けんぞく憐れむべし 下なる人をかみべかみべと相心得べし

— 産して たんたる人は血の池に沈むと心得べし

— 酒に水をつかひし人は酒の地獄に沈むと相心得べし

— 無間の鏡をつきし人は蟻の地獄にしづむと相心得べし

— 長日月光仏のおみあかり油を売し人はその心をしらざる人が油の地獄に落ると心得べし

— 二升をつかひし人は末の世に八まん地獄に沈むと心得べし 本妻 妾と我つみににくまれておとめもとの地獄に沈むと心得べし

— 富士の人穴は餓鬼がり 修羅あり畜生道あり また極楽あり地獄あり

- 一 闇の夜に啼かぬからすの変ききば生れぬさきの父ぞこひしき
- 一 三足のからすのなひて志らせるをもって仙元の御おしへなり
- 一 三衣を着したる人のうわさ致すべからずはか印切るべからず 宮のこずへ1本も打べからず 未の世に墮罪とはかったいに生れ出ると相心得べし
- 一 博奕遊女諸勝負事は一度にてもくふべからず 主ある女に色を移さず 是三みやふといふ人の物をかすめ取べからず 未の世に盲人に生れべし

(3)

- 一 富士より出てふじにいる身は
- 一 何度生れても女はおんななり男なり男なりと相心得べし 瓜のつるに茄子はならぬ 茄子に瓜はならざるに人間は畜生にも成やすきものと相心得べし
- 一 滴のみづも大切に致すべし 親の恩と水の恩は送られぬものと相心得べし
- 一 南無阿彌陀仏を一声唱ふれば一声一声に極楽に蓮の榮ふると心得べし 腹たちぬる時はその花消滅すると相心得べし 腹のたつときは念仏をとのふべし
- 一 我れなき後におゐて正月元朝に出生なさんとは思ふが 松の内に松といふ名の付て出生なしたらば我れだとおもへ

食日一行妙心

(中略)

- (4) 御上より被出事は一期を限りに急度相守べし村法国法仁義の道をかかさず 上は下を憐れみ 下は上を急度敬ひ兄は弟をうやまい弟は兄を急度うやまうと相心得へし仍て如件

食日一行妙心

- (5) 我生国は美濃国大野郡神原郷

幼名 熊吉といふ

父は是高親王近江国のきみがはたに於て大君大明神という末葉 美濃国大野郡きれの庄 おふづきし小倉氏に数代を経たり 同国西塔たつおきの身内にわけあって身内におゐて石野權之丞という 尾張國小田信長が為にたつおき落城致し 夫より岡田将監内も数代を経たり

古野小市郎

藤原吉忠

御いとまいたし

東叡山御領

信州みのち郡旨天台

善光寺 萬善堂弟子

法師 妙 心

- (6) 別堂大勸進いとまいたし
善光寺の惣門出て 同国
諏訪大明神へ参詣いたし

諏訪の海衣が崎に来てみれば

ふじのみねこぐあまの釣舟

歌の心にまかせて富士山に籠す

- (7) 鹿留山
三体躰大権現

田

かしこくも祈誓をかけよ三生射
五穀成就蚕繁昌
我山は富士の高根のうしとらの
恩人かどをまひるよろつ世

田

三生躰八方志やうめんに
おみて人生にいる

南無阿弥陀仏
妙法蓮花経

文化十二^乙亥三月廿九日

三生躰元祖 食日一行妙心

甲州都留郡鹿留村

白須滝右衛門

渡辺仲右衛門

相川 茂助

白須平太郎

菊地 源蔵

御正射 開山 講 中

法師 妙心

伊藤善兵衛

10. 妙心の出身

妙心が(4)で述べている中で、「是高親王近江国の君畑の大君大明神の末葉ということ、また小倉氏に数代を経たり」云々とある。

木地師の「万年帳」を見ると、是高親王（惟尊親王）として綴っている。この「万年帳」は嘉永5年（1852）に木地屋部落ヤジロウ家の祖 小椋（小倉）儀右衛門が書いているが由緒書は貴重なので掲げる。

由 緒 書

- ① 我先祖者、人王^(皇)55代惟尊親王末流ニして、近江国愛智郡筒井峠ニ而木椀之器^(木)地職相稼ギ、罷在候得共、近辺山木切尽し、則日本国中山木御免之御論旨頂戴シ、諸国江散在致シ、木地職相稼キ、先祖小椋市左衛門と申者、飛州ニ散在、飛州山内ニ面相稼罷在候。其子儀兵衛、越後国大所村江罷越候而、しばらく此所ニ居住仕、夫より同国小滝山内ニ罷越 年3ヶ年住居仕、其節出火いたし、家財焼失いたし、猶又、大所山内江罷帰り、此所ニ而又々相稼ギ、夫より信州松本様御領小谷郷戸土村山内 800平と申所ニ罷在候得共、木地ニ成山木切尽シ、何れニ茂散在仕、我職相稼可_レ申と存候所、(以下略)

「きじゃ」 杉本寿著

轆轤師制度の聚落立地の条によれば、

「轆轤師の人々がその業祖乃至は始祖の御君として帷喬親王を奉載した所以か、是等の轆轤師聚落の山間地方には専き御身の御行蹟を中心とした物語が多い。」また、平地農村に於ける轆轤師聚落の条には、

「戸数60軒が巨椋（オグラ）姓である。（中略）巨椋初蔵氏（50）の実家である。

田 巨椋孫左衛門家は、600年前迄は小倉の姓を名乗り、代々庄屋を勤めていた新栄村の草分であった。「(以下略)

上のことから、妙心直筆の「我生国は美濃国大野郡神原郷、幼名熊吉といふ」云々とあるのは、この、妙心法師こと小倉氏、降って古野小市郎は、現在本巢郡岐礼庄にいた木地師であったことが知れる。その妙心が、どのような事情で、何の目的で、岐礼庄から移った神原郷を離れて諸国行脚の聖となったのか。

『横蔵寺略縁起』では「幼少より仏心仏心篤く、17歳の時諸国の寺院仏跡巡礼の旅に上り……」とあるが、その展開、目的は直接記されていない。

これについて、『御正射開山食日一行妙心法師』渡辺綱吉著は「妙心法師が幼少の頃に両親を失い、仏道を行ずるうちに、更に広く修業の道を求めて神原郷を出発したのかもしれない。これは、私の想像だが、その理由は、両親のうち片親でも生きていたなら、旅先から便りぐらゐはできる筈であり、そうすれば、何等かの形で記録または伝説となり得たものが残りうる筈であるのに、今日、それらしき記録も、伝説もないということは、便りが書けなかったか、あるいは便りを出す人がいなかったかと言うことである」云々と述べている。

11. 妙心の即身仏への密教的背景

妙心上人が得度をうけたのは、浄土宗の善光寺で、上人の即身仏を流行神的に祀りあげた御正躰山三代目の巨戒上人も浄土宗の増上寺系であり、『現証往生伝』などをみると、増上寺は舍利信仰によって、江戸の浄土宗勢力の拡大に積極的に力を入れていた寺である。妙心上人の即身仏だけが、「舍利仏」という特殊的な呼び方をしているのも、当時流行していた浄土宗の舍利信仰の影響である。

尚富士山系行者の入定は土中入定ではなく、石室や岩穴に厨子を組んで入定する特徴がみられるのは、第一次、第二次のミイラ加工が便であったことにもよるであろうし、そのまま舍利仏として拝めたとということでもある。

入定厨子に入り、生きながらの姿のまま仏となろうとする入定者は、まず自己の肉体を意志によって酷使し、すべての余れるもの、すべての不要のもの、すべての雑念を取り去らねばならない。即ち密教における「父母所生即生大覚位」の境に達しなければ、この身このままの姿で仏となる、即身仏となることはできないのである。

仏教では、人間は死後にその生前の行為によって果報を受ける6つの場所を設定している。地獄。餓鬼。畜生。阿修羅。人間(にんかん)。天上の6つで、これを六趣または六道という。この六道のうち、地獄。餓鬼。畜生。の三道を三悪道といって、生前の悪行の報いによって、さまざまな苦行をあたえられる場所だとされている。

地獄は大別して八熱地獄と八寒地獄にわけられる。八熱の方は想。黒繩。衆合。叫呼。大叫叱。焼炙。大焼炙。無間の8つである。

これらの死後の仏教の説にしたがって、即身仏志願の難行苦行も、いっさいの人間煩惱からの超脱を目的としておこなわれる。

その一例は、雪深い山中に踏入り、滝に打たれ、行人小屋の前にしつらえられた池(御手洗池)(みたらせ)に飛びこむ。寒中、凍りついたみたらせに胸までつかり、手には一把の線香に火を点じて持ち、それがぐゆり燃えつきるまで(およそ1時間)掌に火がつくまで、真言を誦しつつける苦行をする。手には灼熱、肉体はこごえる。これこそ仏説にいう八寒八熱地獄にそのまま身をゆだね、そこからの超脱をめざす苛烈な苦行なのである。

みたらせがなく川もないような深山では、湧泉や井戸水を手桶でかぶる寒行をおこなう。最初の1杯は頭からかぶる。つぎは額から、3杯めは咽喉から、4杯めは左肩から、5杯めは右肩から、6杯

めは胸から、7杯めは腹からかぶる。そして8回くりかえす。都合56杯の冷水をかぶるのを定法とする苦行である。

即身仏志願の苦行は、さらに餓鬼道からの超脱にもひたむきの情熱をかたむける。即ち穀だちをおこなう木食行である。まだ3年3ヶ月1000日にわたって、米、麦、大豆、小豆、胡麻の5穀（一説には、米、麦、粟、黍、大豆ともいうが一定していない）を食することをやめる。その間は蕎麦（そば）稗、青菜、木の実などで生命をつなぐのである。この5穀だちの修行をおえると、さらに蕎麦、黍、粟、稗、唐黍（とうきび）などの5穀をもあわせて10穀だちの行をする。そして胡桃、藜栗、茅（ちがや）の実などをごく少量だけ食する。

こうした荒行は、まさに餓鬼道における苦をそのまま甘んじて受けつづけることであり、餓鬼道からの超脱は、そのまま淫欲とかの煩惱からおれを解き放ち、畜生道の苦をも超越することとなるのである。

即身成仏志願者の苦行の目的は、まさに、三悪道からの超脱にあったことはいまでもないが、同時にこうした苦行は、もっとも、ミイラになりやすい状態に、みずからの肉体の条件を向けさせるものである。

1000日、2000日にわたる木食行によって、体内脂肪の殆んどが落ち、骨と皮ばかりの肉体になる。そしてみずからの死期の近づいたのをさすると、今度は完全断食に入る。水だけは飲むが、これとても長くはつづかない。

衰えきった肉体は、おそらく数日にして、臨終期を迎えたことであろう。

そしてある者は、同門の行人や信者に別れを告げて土中入定をとげ、また土中入定のいとまもなく大往生をとげた者は、故人の意志によって周囲の者が棺におさめ入定墓に葬ったものである。

現存の即身仏の殆んどは、この方法で即身仏になったものと考えられるのである。

これらの即身仏志願の苦行は、厳冬の山中で滝に打たれ、みたらせに胸までつかり、線香をともして掌をやき、凍水をかぶり、断食をするという荒行の姿から、山中修験者、山伏の苦行の形との共通を考えさせられる。

『御正躰開山食日一行妙心法師』渡辺綱吉著は「妙心法師は、真筆原本8項目をどの位の年月を要して書かれたのであろうか。手掛りとなるのは、出羽の湯殿山に残るわが国のミイラについて解説している内藤正敏、『ミイラ信仰の研究』松山荘ニ『日本ミイラの旅』によると、ミイラになるためには、木食行と共に参籠なされるが、この参籠は、1000日行とって、1000日単位であり、2000日行、3000日行という途方もない長年月を修行した行人もあったということである。従って、妙心法師の真筆は、参籠中の法師が、その時々感得したこと、考えたことなどを心の赴くままに書き留めたもので、数年あるいは、それ以上の年月がかかっているかも知れないのである」云々とあり、妙心上人は、湯殿山や羽黒山に見るミイラ上人の如く、彼もまた長い間参籠のため、即身成仏のため荒修行をして行ったのである。

引用参考文献

- | | | |
|---------------|------------|-----------|
| 富士山御師 | 伊藤堅吉著 | 図譜出版 |
| 史観 第82冊 | 松本 昭著 | 早稲田大学史学会編 |
| 日本のミイラ | 安藤更生著 | 毎日新聞社 |
| 日本のミイラ | 内藤正敏著 | 大和書房 |
| 日本の即身仏 | 佐野文哉・内藤正敏著 | 光風社書房 |
| 御正射開山食日一行妙心法師 | 一座禪ミイラの神髓 | 渡辺綱吉著 |
| きじゃ | 杉本 寿著 | 文泉堂 |

民俗資料選集②文化庁編

国土地理協会

揖斐郡誌

揖斐川町史

下記の方々には大変お世話様になり、御指導を戴きましたので紙上で厚く御礼申し上げます。

岐阜県揖斐郡谷波村大字神原 横蔵寺住職

名古屋大学医学部教授（現中部労災病院長）

小菅 真一

中部日本新聞社記者（現愛知学院大学教授）

横井 保平

故 名古屋大学医学部教授

古田 莞爾

未亡人

古田 寿子

岐阜医科大学勤務（現メキシコ留学） 亀山 久雄